

ワクチン接種は患者の生活の質を高める重要なツール

宮上泰樹

順天堂大学医学部総合診療科学講座

正直、私は幼少期ワクチンが嫌でたまりませんでした。インフルエンザのワクチンを打ちに病院に行ったのにワクチンを打つ理由を医師に聞いたり、打



つ前に少し（多分少し）駄々をこねたり。その数年後、インフルエンザにかかり、関節痛や筋肉痛がひどくトイレに行くのも一苦勞、という経験をしました。これらの経験を反芻すると、患者には「なぜ無症状の時に苦痛を受けに病院に行かなければならないのか」という思いがあり、罹患後を事前に想定することの難しさを感じます。

私が、ワクチンの大切さを感じるまでにはいくつかのストーリーがありました。①医学生時代、日本脳炎にかかり重症化して麻痺などが残った小児の患者を診た時、②医師7年目、侵襲性の肺炎球菌感染症で入院した患者を全力で加療したものの助からなかった時、最後に、③実母が何度も帯状疱疹にかかり、顔面にまで波及したにもかかわらず抗ウイルス薬のみの対応を続けていたところ、同僚に「ワクチン打ってあげないの」と言われてハッとした時です。これらの辛い経験を経て、患者にワクチン接種を勧める意義を感じるようになりました。

一方で、「痛い思いをするだけ」「副反応が怖い」と思っている人にワクチンを打つのは非常にハードルの高い行為です。しかし、医師、特に総合診療医であるわれわれは、ワクチンを打たなかったことのデメリットをたくさん見てきていると思います。本特集では、どの患者にどのワクチンを打つべきか、ワクチン接種に否定的な患者にどう話しか、気を付けるべき副反応など、総合診療医の視点でまとめました。明日からの日常診療に使えるコンテンツばかりですので、ぜひご活用ください。



内藤俊夫

順天堂大学医学部総合診療科学講座



順天堂大学医学部総合診療科学講座は、設立以来ワクチン診療を重視しています。例えば、医局員の質の評価指標の1つに「受け持ちの65歳以上の患者へ

の肺炎球菌ワクチン接種率」を導入しています。総合診療とワクチンは患者啓発や予防医療の観点で極めて密接に関連しています。そして、総合診療医は「病気を治す」だけでなく、患者・家族がいかにして幸福になれるかを重要視する必要があります。ワクチン接種は単なる予防手段にとどまらず、患者の生活の質を高める重要なツールです。

大学病院の役割としては、最新の研究に取り組み、多くの患者のアウトカムを向上させる責務があります。われわれは職員・学生へのヒトパピローマウイルスワクチン集団接種や新規ワクチンの治験・臨床研究など、幅広いアプローチを行ってきました。今後の医療に求められるものを鑑みると、「予防医療」のさらなる発展が不可欠であると痛感しています。個々の患者に対するオーダーメイド医療の提供や、AI技術を活用して行動変容を促す予防的アプローチなど、予防医療の未来は無限の可能性を秘めています。

昨今の感染症の世界的な流行は、ワクチンの重要性を再認識させる契機となりました。総合診療医は、ワクチン接種の知識と技術を標準装備した医療者として、これらの新たな課題に対応するため、予防接種の最新情報を常にアップデートし、最善の選択肢を提供することが求められます。

本特集では、われわれのこれまでの活動や経験を基に、ワクチンの適切な利用方法を紹介するとともに、臨床現場で直面する課題や、ワクチン接種の具体的な実践方法、今後の展望についても触れています。皆様とともに、予防医療の未来を切り拓いていけることを心より願っております。

